錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第４３９号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2023

みんなでつくる
錦城高校新聞

令和６年能登半島地震による被害を受けられた皆様に、お見舞い申し上げます。新聞委員一同、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

先輩の熱意を引き継ぐ 新生徒会意気込む

新旧生徒会役員座談会開催

11月28日(火)に被服室にて、生徒会座談会を行った。11月に発足した現生徒会役員と前生徒会役員が集合し、錦城が抱える課題や全生徒会の反省を踏まえた今生徒会の活動方針について意見交換がなされた。（編集部共同取材）

錦城の未来について考える新旧生徒会役員

新生徒会役員の意気込み

新生徒会長となった山田拓仁さん(2K)は、錦城生に3年間の高校生活を後悔してほしくないという思いで生徒会に入ったと語り、「1年後に、先輩たちと同じように何かを残せるように、生徒が良い学校生活を送れていると思えるように活動していきたいです」と意気込んだ。

新生徒会副会長の峯村苺花さん(1D)は、自分の置かれた立場とよく向き合い、生徒会の活動を通して自分自身も成長していきたいと意気込みを語る。その上で「先輩方の熱意を引き継ぎ、企画に繋がることも考えていきたいです」と自身の想いを口にした。

新監査委員長を務める浦山一花さん(2E)は、友人の錦城生が「学校やめたい」と話すのを聞いたことがあるという経験を踏まえ、簡単に『やめたい』と思わず活力を持って学校に来られるような、『いいとこある』と思える学校にしたい」と熱い想いを語った。

新錦城祭実行委員長の中村俐月さん(1J)は「先輩たちから引き継ぎで言われたことをしっかりと受け止め、自分でも何かを良いものに変えていきたい」と話す。他の委員と比較して、経験値に差があると語った上で、自分でも手伝えることを積極的に探し、みんなの力になりたいと前向きな姿勢を示した。

課題にどう向き合っていく?

座談会では、錦城生の風紀の乱れが議題に上がった。現会長の山田さんは、問題は多くあると前置きした上で「呼び掛けをするようになってから、自転車の運転マナーやイヤホンのマナーは向上したように感じます。僕たちはルールを守っていないところに目を向けがちですが、大半の人はルールを守っているという認識を忘れないことが大切だと思います」と話した。山田さんは、同じ課題を抱えている近隣校同士で意見共有することの必要性を訴えた。

錦城が抱える課題と真剣に向き合う

旧生徒会監査委員長の加園羚也さん(3K)は「マナーやモラルが飛躍的に改善すると考えない方がいいと思います」と述べ、この問題に対して長期的に向き合っていくべきだと語った。

※　※　※

座談会の記事は二面に続きます。

校則改正 時代の流れに沿った校則を

11月15日の全校集会で、校長先生から髪型規定の改正のお話があった。主な改正箇所は第2・3項の男女別の頭髪規定の廃止で、「2．男子の頭髪については、耳を覆わず、襟にかからないようにする。異形の髪形は禁止する。3．女子の頭髪については、飾りピン、リボン等髪飾りは禁止する。また人工的ウエーブ・カール・クリップ等も禁止とする」という規定が改められ、12月の生徒会報にて「1．素を大切にし、パーマ・染色・脱色・人工ウエーブ・カール等の手を加えない。2．飾りピン、リボン、クリップ等の髪飾りは禁止とする。3．異形、奇抜な髪形は禁止とする(モヒカンヘア・マンバンヘア・ドレッドヘア・ラインを入れる等)」という新規定が発表された。

男女の垣根を取り払ってほしいです

校則改正に対する校長先生の思いを改めて伺った。校長先生は、「素を大切にする」という考えを原則としたうえで、ジェンダーレスの考え方が日本にも反映されてきている風潮を考えた結果、改正に至ったと話す。この「素を大切にする」という原則について、校長先生は髪色を例に挙げ『地毛の色素が薄く、目立つのが嫌』といった理由で黒く染めて入学するなら黒髪で、ありのままの色で入学するならそのままで3年間変えずに過ごすということ」だと説明した。「この改正が良いのか悪いのかという迷いもありましたが、世の中では『○○らしく』という考えも変化していて、校則での『男女』の要素は不要なのではないかと思いました」と自身の思いを語った。校長先生は、自分の中にある垣根をなくす第一歩として、学校内で『男女の垣根』をなくすことが必要だと話し「今回の改正をきっかけに男女で分けられてきた社会の役割について考え、皆さんの中にある『男女の垣根』を取り払ってほしいです」とメッセージを送った。（瑞）

自分の手で未来をつかみ取れ

一年生進路探究の日開催

12月19日(火)、1年生は進路講演会の授業を受けた。1限では、リクルートの森隆剛さんが「社会人基礎力」をテーマに講演してくれた。社会人基礎力とは一般に、①前に踏み出す力②考え抜く力③チームで働く力を指す。今回は、これらが日常の中でどう発揮されるか、個人やペアで実例を考えながら講義が進んだ。例えば①の力なら「部活で新しい曲に挑戦する」などである。森さんは61回生に「自分の可能性に目を向ければ、変化の多い社会をもっと楽しむことができます」と話した。

大学の講師の方による講義

2・3限では、生徒がそれぞれ選んだ講義を各教室で受けた。医学の講座では、医薬品開発(治験)についての解説が行われた。治験は、まだ治療法がない病気の薬や、更に新しい薬を作るために不可欠な過程だ。薬の誕生までには、薬の候補となる物質の発見、動物実験やヒトへの効き目と副作用の調査、国の承認と言ったステップが必要となる。医師でもある講師の三邊武彦さんは、受講者に向けて「目の前を頑張るのみ。将来も見越して沢山の経験をしてほしい」とメッセージを語った。

卒業生の講演も

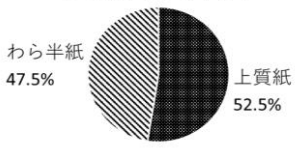
4限では、錦城の49回卒業生である五十嵐葵さんと山﨑春香さんの二人が、それぞれのお仕事や学生時代のエピソードについてお話してくれた。五十嵐さんは国立国際医療研究センター、山﨑さんはキャノンマーケティングジャパンで働いているのだが、二人のお話の中で共通していることがあった。それは、「今しかできないこと」の重要性だ。高校では部活や行事、大学に入ってからはアルバイトなど、様々な経験をしてほしいと二人は語る。また、部活と勉強の両立について「日々の宿題や小テストに特に力を入れていました」と教えてくれた。

卒業生お二人のお話を受けて、藤井喜与人さん(1B)は、「卒業生の方から直接お話を聞く機会なんてめったにないことなので、貴重な経験になったと思います。お二人のように自分自身の経験を未来の後輩たちに伝えられるよう、頑張っていきたいと思います」と力強く話してくれた。（普）

プリントどちら派?大接戦を制したのは！？

授業プリントが昨年秋に上質紙も使われるようになった。年末に新聞委員会でアンケートをとった結果(有効回答数４０)、わら半紙派と上質紙派は半々であった。わら半紙派からは「紙が薄いためノートやファイルで保存する際にかさばらなくて使いやすい」、上質紙派からは「破れにくく書きやすい」という声が多くあった。（蘭）

授業で使われるプリントについて、わら半紙のものと上質紙のもの、どちらが良いですか？



クリスマスを彩るハーモニー

吹奏楽部、室内楽部、ルネこだいらでクリスマスコンサート開催

吹奏楽部

12月19日(火)ルネこだいら大ホールにて、吹奏楽部のクリスマスコンサートが行われた。第一部ではLeroy Andersoン作曲の『クリスマス・フェスティバル』など3曲が披露された。第二部はアンサンブルステージ。12月28日(木)のアンサンブルコンテスト東京都予選に出場するクラリネット六重奏と金管八重奏の演奏が行われた。

トナカイとサンタの登場に沸く会場

第三部は森田一浩作曲の『ウインターワンダーランド』から始まるポップスステージ。曲中にはトナカイやサンタクロースのコスプレをした吹奏楽部員が客席に登場し、会場は大きな盛り上がりを見せた。最後に、『交響組曲 ハリーポッター』で幕を閉じた。

部長を務める長岡巧真（2K）さんは今回の演奏会について「1年の中でもルネこだいらというのは大きい舞台で、部員やお客さんから楽しめたという意見が多かったのはよかったことだと思います」と振り返った。

室内学部

12月20日、ルネこだいらで室内楽部がクリスマスコンサートを開催した。第一部では「アナ雪メドレー」を含む計5曲が披露された。弦をはじいて音を出す「Plink, Plunk」では、アップテンポで軽やかにはじかれた音が会場に響いた。第二部では1年生の学年曲back numberの「クリスマスソング」や2年生の「jazzメドレー」、有志では「Adios Nonino」や「二つのバイオリンのための協奏曲」が披露された。「二つのバイオリンのための協奏曲」では、経験者2人による演奏がピアノと合わさって観客を圧倒させた。

美しい音色で観客を魅了

第三部は各楽章でダンスの雰囲気を表現した「カプリオール組曲」から始まり、山下達郎の「クリスマス・イブ」や街中でよく聞こえてくる「そりすべり」と続いた。アンコールは鈴の音とともに登場したサンタとトナカイが会場を盛り上げた「ジングルベル」で幕を閉じた。

部長の福渡瑞季さん（2I）は「錦城祭からの期間が短く、練習時間が限られていた中で協力して仕上げることができたと思います」と振り返った。また、福渡さん自身は4回目のルネこだいらでの演奏会だったが、部長として出るのは初めてだったそうだ。そのため、みんなの前で話すことは緊張や苦労もあったが、それを上回る楽しさがあったと笑顔で話してくれた。（紫・仏）

むらさき草

19世紀フランスの哲学者ポール・ジャネは、「20歳のあなたは、人生の70％をすでに終えている」との衝撃的な発言をした（引用 ピエール・ジャネ，1889『L automatisme psychologique』◀彼は、主観的に感じる時間の長さが年齢と反比例するという法則を提唱した。年少者は時間をより長く感じ、年長者は逆に短く感じるというものである◀数式で説明してみる。人生を80年だと仮定して、80年生きた体感時間を図1の数式で表す。Xには年齢を代入する。1／X＋1は0歳児における心理的長さを1とするためである。この式を積分してみる。80年生きるとすると、人生の体感時間は約1．908と求めることができる◀同様に、20歳の体感時間を図2で求める。積分の結果は約1．322。そして1．322を1．908で割って20年生きた体感時間の全体に占める割合を求めると約0．693、つまり69．3％。よってジャネの法則で言われている20歳までに人生の体感時間の約70％が終わってしまうことが積分によって説明された。（引用：sekkachi.com/entry-integral_life/　2024.1.5閲覧）▼若い時は新しいことに取り組むことで時間をゆっくり感じてしまうのに対し年齢を重ねると、新しい経験が減少し時間を早く感じる。なぜなら脳が同じようなルーティンや活動を単調に感じるからである▼そのようなことを考えると、残りの人生を充実にするためには積極的に新しいことを行うことが大切である◀高校1年生なら人生の体感時間の約62％が過ぎている。悔いのないよう、新しいことにチャレンジしていこう。（希）

$$\int_0^{80} \frac{1}{x+1}\,dx$$

図1

$$\int_0^{20} \frac{1}{x+1}\,dx$$

図2

©錦城高校新聞委員会編集室 2024
錦城高校新聞　２０２４年（令和６年）１月１９日（金曜日）

特集　生理用品の学校設置について

都立校では全校設置

昨年11月に行われた生徒会選挙に立候補した鍋島綾月さん（1K）は、生理用品の設置についての公約を掲げていた。編集部では東京都の対応について調べてみた。（編集部共同取

昨年の選挙公約から考える

生徒会選挙に立候補していた鍋島綾月さん（1K）は、学校生活において集中すべきことや楽しみたいことがたくさんある中で、小さな不安感を取り除く取り組みとして公約に各階に一定数の生理用品を設置することをあげていた。この公約を掲げたきっかけは「生理のときにナプキンがあったら便利」という友達の希望からだという。鍋島さんがどのようにその案を錦城で取り込めるかを考え、設定したそうだ。公約に対し、鍋島さんは「生理は女子だけにおこるもので、理解がされ難い面があるため、女子生徒だから考えられる公約、というのを重視しました」と話す。また政府がPMS（生理前症候群）を、追試の正式な理由として全国の教育委員会に通知する方針を固めたことにもふれ「入試という大事な日に生理痛がひどいと全力のパフォーマンスができないので、いい取り組みだと思います」と語った。

錦城の保健室に常備してある生理用品

東京都の対応を調べてみた

２０２１年秋から、東京都では全ての都立学校の女子トイレに生理用品が設置されている。児童・生徒はこれらを自由に使用することが可能だ。

この生理用品の無料提供には、「生理の貧困」問題が関わっている。「生理の貧困」とは、経済的な理由などから生理用品を入手するのが困難な状態のことだ。女性特有の生理用品等にかかる費用は、１月で約５００～１２００円、生涯では約40万円かかると言われている。国の調査によると、回答者の８・１％が購入・入手に苦労したことがあると答えたそうだ（「生理の貧困」が女性の心身の健康等に及ぼす影響に関する調査＝厚生労働省２０２２年２月）。経済的な側面に加えて「親に頼みづらい」といった、生理を話題にしづらい風潮も「生理の貧困」を助長させる原因となったようである。

その中で、いつでも、誰でも生理用品を学校で手に取れる環境を作ることは、「実は困っていた」「生理用品を対面で受け取りづらい」といった学生たちの想いに寄り添うことへの第一歩として期待がされた。例えば、他校に先立って女子トイレの生理用品設置を始めた都立新宿高校では、特に周知をしなかったにも関わらず、３か月で４１０以上のナプキンが使用されたそうだ。設置前までは、学校内で生理用品を手に取れる場所は保健室だけだったという。その時は年に10個ほどだったという使用数は、設置場所を変えただけで大きく増加したことがわかる。２０２３年現在、東京都以外の道府県でも、生理用品の設置が始まりつつある。ただ「金銭的に余裕がない家の子供は仕方ないが、何でも与えすぎるのはよくない」「親の責任が薄れる」といった意見も都教育委員会に寄せられている。（都ＨＰより）

＊＊＊

生理用品の設置について調べてみると、様々な対応や課題が見えてきた。新聞委員会では継続してさらに調べてみたい。

〈新旧座談会〉続き　新生徒会へ応援メッセージ

新旧生徒会メンバーによる座談会では、前期生徒会により、これまでの活動の振り返りと今期生徒会のメンバーへのメッセージが送られた。

前生徒会長の高梨恭一さん（３Ｄ）は、自身の経験を踏まえて「先生とのパイプ」について語ってくれた。「これまでに自分が持ってきた仕事の７割は、先生からの指示だけでなく僕自身が先生たちと話していてやらなければいけないと気づいたことです。必要とされているものをぜひ自分で見つけて行動していってほしいと思います」と自身の願いを示した。また、高梨さんは「ルールを引き継ぐのではなくて、なぜそのルールや仕組みがあるのかという本質を引き継いで欲しいです」とも話す。「やり方はいくらでも変えていいです。ただ、様々な先輩たちから引き継いできた、こうあるべきだという信念だけは曲げないでいてください」と新生徒会のメンバーに語りかけた。

新生徒会へエールを送る

１年次の生徒会選挙で落選した経験があり、自分を見直す良い機会になったと話すのは、前監査委員会委員長の加園羚也さん（３Ｇ）。１年生の時に考えていた、生徒会として何を誰のために頑張りたいのかという初心が原動力になりましたと振り返り、「自分はその活動を誰のために、何のためにやりたいのかということを明確にしてほしいです」と思いを語ってくれた。

前期一般委員の塩谷佳太さん（３Ｋ）は「最初はうまく周りを見ることが出来ないかもしれませんが、３年間その時々のことを皆でしっかりと考えて行動していけば、少しずつ視野も広くなります」とアドバイスする。これからの錦城を担っていく後輩たちへ向けて「昔を引き継ぎつつ、今までにないよりよい学校にしていくことが大切だと思います。頑張ってください」と激励のメッセージを送った。

先輩たちのアドバイスを生かし、新生徒会もこれからの活動を頑張ってほしい。（瑞）

錦城生、地域清掃に参加

12月17日(日)、小平中央公民館・創価高校主催の地域清掃に錦城高校の生徒が参加した。中央委員会のメンバーを中心に、ボランティアの生徒が加わった形だ。錦城が活動に参加したきっかけは主催の創価高校からのオファーによるもので、他に白梅学園高等学校、白梅学園清修中高一貫部、小平高校が清掃に参加した。新聞委員会では今回、一般中央委員として活動に参加した鈴木萌衣さん（１Ｄ）と佐々木晶大さん（１Ｄ）にインタビューを行った。

広がる交流の輪

今回の活動は清掃と小平についての学習の二つで、清掃した場所は創価高校やその周辺だそうだ。道や公園で落ち葉拾いなどをしたという。公園では、地域の人と親睦を深めるためにレクも行われた。他のボランティアの人と一緒に餅つきをしたり、焼き芋を食べたりもしたそうだ。

活動を終えた鈴木さんと佐々木さんに感想を聞いた。鈴木さんは「他の高校の人と交流をし、仲良くなることができて良かったです」と話す。佐々木さんは「他校の人と高校生ならではの世間話ができました」と教えてくれた。今回の清掃には小学生もいたそうで、二人は本活動を、普段関わることのない人とも交流ができる貴重な機会だと語る。ただ、錦城高校からの参加者を募った際になかなか人が集まらないなど、錦城の参加までには苦労もあったという。

今後このような地域の活動に錦城の生徒が参加する機会があるかはまだ未定だが、その際にはぜひ募集のポスターをしっかり見てほしいと二人は話した。（晋）

小説家の夢への第一歩

富山銀行や北日本新聞社主催の「第20回高岡・山町ポエム大賞」で、加納奈央さんが素晴らしい詩で「ポエム大賞」を受賞した。彼女は「自分の作品を世に残したい」という思いから、教員室前のポスターをみて応募したという。加納さんは受賞について、「初めて応募した作品がこうして形に残ることができてうれしいです」と喜びを口にした。彼女は今後についても「小説家になりたい、次回は小説を書いて応募したい」と意気込みを語った。この受賞が、新たな一歩の始まりとなることを期待する。加納さんの作品は、高岡・山町ポエム大賞ＨＰから見ることができる。

喜びを語る加納さん

(https://kitanippon.info/takaoka/yamacho-poem/)　（布）

写真部　中央大会で入選

昭和記念公園で撮った宇佐美さんの写真

写真部の砂野結月さん（１Ａ）と宇佐美朋夏さん（１Ｋ）の作品が第46回東京都高等学校文化祭写真部門中央大会で見事入選を果たした。砂野さんは、錦城の校門にあるカーブミラーに映る車と夕焼けを収めた写真、宇佐美さんは、昭和記念公園に咲くコスモスとテントウムシを収めた写真を出品した。写真について２人は偶然の瞬間を収めた写真だと話し、あまり考えすぎずに撮影できたことが良い結果をもたらしたと思うと振り返る。砂野さんは、「自分の見た景色をありのまま写して、誰かの心を動かすことができる作品を作れるよう、頑張っていきたいです」と話し、宇佐美さんは「大会でさらに上を目指せるように頑張りたいです」と意気込んだ。実際に出品された作品は錦城のインスタグラムから見ることができるので、ぜひチェックしてみてほしい。（蘭）

現代と重なる物語

逢坂さん作家講演会開かれる

12月10日(日)、立川国際中等教育学校にて「東京・学校図書館スタンプラリー」実行委員会主催による『同志少女よ、敵を撃て』の著者、逢坂冬馬さんの作家講演会が行われた。逢坂さんのデビュー作であり、第11回アガサ・クリスティー賞を受賞した『同志少女よ、敵を撃て』は、第二次世界大戦中の独ソ戦の中を女性狙撃兵として生きようとする少女の物語である。

今回の講演会では、図らずも現代の戦争に投影して読者に読まれることになった作品への逢坂さんの思いから次作の展望まで、様々なことが語られた。物語の中で描かれる「マイノリティ性」には、女性兵士のジェンダーを問いかける目的もあったといい「きちんとマイノリティ性を書かないと、誠実な作品にならないと感じました」と自身の想いを語った。また逢坂さんには、『同志少女よ、敵を撃て』が10万部を突破した２月24日、まさにその日にウクライナ侵攻が始まったんです。あの感覚は忘れられません」と当時を思い返した。「自分はこれを世に出してよかったのだろうか」という葛藤もあったという逢坂さん。しかし、次作を書くにあたって「今、自分に求められていること」を考えているそうで「戦争に組み込まれたら変わるしかないのか、いやそうではないということを示せる一つの手段だと思っています」と力強く語ってくれた。

作品への思いを語る逢坂さん

講演会に参加できなかった生徒のために、参加校の生徒・教職員のみ限定で１月31日まで講演会の動画が公開されている。司書の渡辺先生にメールを送ることで動画のリンクを得ることができるので、もし興味のある方がいたら動画を観てみてはどうか。（瑞）

続・生徒総会を振り返る

11月15日(水)に行われた生徒総会内で、前監査委員長の加園羚也さん（３Ｋ）から先生のマナーについての主張があった。加園さんが登校途中に小平ロードで見かけた、歩道でベルを鳴らしながら自転車で走っていく先生の話や、授業に遅れてきたにも関わらず謝罪もせず授業を始める先生などの話を行った。

しかし、後日取材を行うと、歩道を自転車で走っていった先生は登校指導の途中だったそうで、加園さんは「誤解を生む言い方をしてしまったら、申し訳ないです」と話す。そのうえで、加園さんは「先生方も自分事としてとらえてほしかったです」と自らの主張を振り返る。

ただし、生徒会を担当する生徒部主任の石塚先生は、生徒総会は本来、文化祭の決算と生徒会則の改正を議題とするものであり、それにもかかわらず議題と関係ないことについての話は、控えるべきだったと話す。

＊＊＊

生徒会則の中では不規則発言が禁止されているわけではなく、生徒の声が届くことも重要だ。一方で会長からの会則改正の詳細が時間の都合で省かれるなかで中央委員から本当にあの場で発言があるべきだったのだろうか、とも言える。今後の生徒会活動でも是非を考えていく必要があるだろう。（紫）

大会報告

体操部
▽11月19日(日)
令和５年度東京都高等学校体操競技男子新人大会
一年の部　個人総合（清水）

吹奏楽部
▽12月27日(水)
東京都高等学校アンサンブルコンテクスト
「金管八重奏」「クラリネット六重奏」出場
「金管八重奏」金賞
「クラリネット六重奏」銀賞

陸上部
▽１月１日第７２回元旦競歩大会(太田・木崎・早川・吉川)出場
▽１月５日第東京都第４・５・６支部主催第２６回新春駅伝競走大会女子Ａチームが３位に入賞

将棋部
▽12月24日関東大会出場
令和５年度関東大会女子の部出場